

雑草イネが発生した水田の防除対策について

雑草イネは赤米であることが多いため、栽培イネに紛れて生育することで**収量低下**や**収穫物への混入被害**をもたらします。雑草イネの形態的特徴は一様ではなく、草姿、出穂期、芒（のげ）・ふ先色の有無、籾・玄米の色調は様々です。

栽培イネと同じ植物種（イネ）であるため、水稻用除草剤のみによる防除では困難ですので、早期発見に努め、抜き取り作業や耕種的防除対策を行って下さい。



雑草イネ発生の問題点

- 1 農産物検査で、雑草イネの玄米が混じっていると着色粒として扱われ、**混入率が0.1%を上回ると1等から2等に格下げ**となります。また、**異品種混入とみなされて、品種銘柄表示ができなくなります**。さらに、流通先から返品を求められることもあります。
- 2 雑草イネはとても脱粒しやすく、一度ほ場に侵入すると急激に増加します。さらに、農業機械を介して周辺の水田に拡散すると、地域全体の水稻生産に大きな被害をもたらしますので注意が必要です。



防除対策

1. 侵入初期の極少発生の場合

- 1) モミが脱粒する前（出穂後2週間以内）に**株ごと抜き取り**、圃場外に持ち出して適切に処分します。既に発生を確認している雑草イネと比較して、稈長や出穂期に差がある栽培品種を作付しておく、区別が容易にでき、抜き取りが比較的容易になります。
- 2) 混入した雑草イネはある程度**色彩選別機で取り除く**ことが可能です。しかし、（収穫前のモミの脱粒で、雑草イネの種子が水田に落ちてしまうことで）水田から雑草イネが減るわけではありません。

2. 既に圃場にまん延してしまった場合

- 1) 雑草イネの出芽がほぼ揃う**5月下旬以降に代かき**を行い、物理的に枯死させた後、遅植えすることが最も重要です。
- 2) 薬剤の切れ目をなくし遅発個体を枯死させることが重要です。①移植当日～翌日に**初期剤**を処理し、その後、②7～10日おきに**一発処理剤**および③**中・後期剤**を処理する**3剤使用体系の防除が有効**です。

継続的に3年程度の防除体系が必要です。

初期剤と一発処理剤は、下表からそれぞれ一剤を選んでください

（令和7年度 茨城県「農作物雑草防除指針」などから抜粋）

表 本県で雑草イネへの効果が認められている除草剤の組み合わせ事例（令和7年4月16日現在）

[初期剤] (有効な時期)		[一発処理剤] (有効な時期)		[中・後期剤] (有効な時期)	
エリジャン乳剤	雑草イネ発生前	カウントダウン1キロ粒剤	雑草イネ発生前	ナイスミドル 1キロ粒剤	雑草イネ発生前～始 (籾葉抽出期)
デルカット乳剤		ジェイフレンドフロアブル			
メテオ1キロ粒剤	雑草イネ発生前～始 (籾葉抽出期)	シンズイZ1キロ粒剤 シンズイZ豆つぶ250	雑草イネ発生前～始 (籾葉抽出期)		

※ 雑草イネに有効な使用時期の多くは「雑草イネ発生前まで」なので注意してください。

※ これら以外の有効な除草剤については、日本植物調節剤研究協会のWEBサイト「除草カタログ」の雑草イネのページ (<https://joso-catalog.japr.or.jp/weed-list/paddy/1>) に掲載された有効な除草剤一覧を参照するか、各農業改良普及センター（農林事務所・経営普及部門）などに問い合わせてください。

3) **水稻収穫後の秋の耕起を行わない**と、「雑草イネ」の種子は表層にとどまり越冬するので、低温による死滅や鳥による摂食の効果が期待できません（ただし、縞葉枯病が発生している圃場では、防除対策として、ヒコバエの早期な耕起が必要になります）。

4) **ダイズやソバ等の作物に転換し**、耕起や攪拌による物理的な枯殺、イネ科雑草に効果のある除草剤の処理を行うことにより、雑草イネの発生が抑制されます。



- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 宮農 News は JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。